
ある魔術師の物語 四話

桜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある魔術師の物語 四話

【Nコード】

N2935S

【作者名】

桜月

【あらすじ】

ダガー使いからなんとか逃げたゼロは廃工場に逃げ込んだ。腕の損壊が激しい魔術師ゼロは、ある作戦を思いつく。バトル多めでお送り致します

ある魔術師の物語 四話 第一章（前書き）

今回は解説多めで、戦闘描写は二章からですm(_____)m

ある魔術師の物語 四話 第一章

「ぐ、痛っ」

…俺は全力で戦線を離脱した後、門からファロを出ようかとも思ったのだが、門をこんな状態で飛び出ても、その後どうするかの前では考えつかなかった為、戦闘現場より少し離れた場所にあった廃工場へと身を潜ませた。

「ぎっ！ぐっ…」

右手の痛みは止まるわけもない。

魔力で腕の傷に栓をして血は止めたが、このまま放つとけば腕が壊死する。

…あの緋天血界は、正確には魔術ではない。

魔術とは空气中に漂う魔力を凝縮、それを行使するのが魔術である。

ちなみに日常生活に使う魔術は凝縮しておらず、魔力をそのまま、火を使うときは火の魔力を、明るくしたいなら光の魔力を空气中から引っ張ってきて行使する

だが先ほどの緋天血界の場合は、魔力を空气中から肉体を通し、自らの血肉を拡散して行使する。

この技法を用いる術は詳しくは魔術、では無く「禁術」とされており、代償が大きい為、行使する者はおるか、術の行使方を学ぶ者す

らまず居ない。

だが「禁術」には一つだけ、多大なる代償と引き換えの決定的な利点があった。

それは、どんなに強力な力を行使しようとしても、詠唱が一言で済む事だ。

攻撃する為の魔術とは

？ 空気中の魔力を、破壊力を持った形へと変化させる

？ 自分自身の心を魔術の行使者へと無意識下で切り替える。この2段階によりこの世界の魔術は完成する。この中で魔術の詠唱は

？ 魔力を破壊力を持った形へと変化させる

事に必要だ。

？ は詠唱する中で切り替わるように、自然と身につく為に詠唱は関係無い。

だが「禁術」の場合、この形を変化させる過程を丸々すっ飛ばせる。

そして血肉を介す為、自分の体の一部のように強力な力を行使出来、一瞬で強力な力を具現出来る。

あの場合は強力な防御力が必須だった。

それにより緋天血界という盾を組み上げたのだった。…緋天血界ならば殆どの攻撃魔術は防ぎ切れる力がある。

その力がダガー三十本など防げない訳がなかった。

閑話休題

「っ痛、多分、追つてく、んだろっ、な。あい、っ」

呼吸が乱れて治らない。

左に抱えてきたこの人も、意識が混濁しているようで時々呻くだけ。

手詰まり。

言葉が頭によぎった。

一応、策はある。

ただそれは、倒す為の方法では無く、殺す為の手段だった。

依頼の為以外には殺人はしない。

心に決めている訳ではないが、必要外の犠牲者は出たくなかった。

なぜなら、俺はまだ依頼書に書いてあった依頼人にあってはいないから。

俺が威力の高い攻撃魔術を使って戦って、ファロで大きな被害をだすようなことがあれば、後々ファロで動きずらくなる上に依頼の達成も難しくなる。

それに下手すりゃ衛兵なんか足下にも及ばない、王国御用達の魔術騎士団が俺を王国の敵と見なして制圧にくる。

いくら奇策策略を練っても勝ち目はゼロだ。門を無理やりに突破したのも本当はマズい。

…いや、当たり前か。

あの依頼書には合流すべき人物の名前や住所などが記載されておら

ず、合流地点も記載されていない。

つまりは向こうから俺を見つけてくれる手筈だったのだろう。

だがこんな状況では俺一人だけこの場から抜け出すわけにはいかない。抱えている人物を俺が庇った時点でダガーの使いにマークされている事だろうし。

何より

「いや、だ。助けて！」

こんな譫言を力なく叫ぶ状態の人を置いて行くような事はしたくない。

となれば…

「こちらから、迎え討って、堂々、と依頼を果たし、に行、こう…！」

まあ、俺もこんな状態では合流出来たとしても、どの道、不都合が発生するだろうし

「と、す、れば。」

行使出来る策を練る。

俺の使用出来る魔術…

腕の損壊状態…

体術…

禁術…

それらの、体のコンディションと自分に打てる手を考慮した結果、殺さずに済む方法を思いついた。

「うし、なら…」

乱れた呼吸を整える。

右手は使えないが止血のおかげで失血死する事は無い。
痛みも神経がイかれたのか殆どない。

問題無し！

…本当はやばいが、生きて帰れば腕の良い治癒魔術師を知っているため問題はない…はず。

「じゃあ、いっちょ派手にやりますか」

俺は準備を整え始めた。

俺が居る廃工場を俺の絶対に勝てる場とするために。

ある魔術師の物語 四話 第一章（後書き）

楽しんでいただけましたでしょうか？

出来ればまた次回お会いいたしましょうm（
—
—
）m

ある魔術師の物語 四話 第二章（前書き）

二章目です。後半主人公が悪役みたいな行動をしますが、どうぞ見
限らずこれからお付き合い下さい（ ）（ ）

ある魔術師の物語 四話 第二章

15分後

工場内、共に屋根に仕掛けを仕掛け終えた俺は、堂々と外に出た。抱えていた人物は廃工場の奥にあった、地下倉庫に置いてきている。

…屋根に出た時は攻撃されなかった。

ただ嗅ぎつけられていないか、警戒されているのか。

「そんじゃま、開戦の狼煙を打ち上げますかね」

と、魔力を集め、そのまま、廃工場の屋根に叩き付けた。

その瞬間

チュイン…

という静かな音と共に、魔力が増幅され、周囲に爆散した。まさしく、この世界での開戦の狼煙。

己が力を誇示する、戦いへの儀式。

「…っと成功、あとは此処に来てくれりやいいんだがなあ」

そう。其処が問題だった。

相手は仕事か私情かは分からないが、あれだけの殺意を持ってダガーを投げつけて来たのだから、恐らくまだ俺達を探しているはず。

だが警戒されることが問題だ。

警戒されれば、戦いが長引く。

腕と、あの人の具合を考えても長引かせる訳にはいかない。
かといって飛び出す訳にもいかない。

時間制限付きの、根比べ。

衛兵達が察知してやって来る可能性もあるが、其処も抜かりはない。
俺の魔力を知るものしかこの場所を突き止める事の出来ない結界を、
屋根の上に狼煙と共に作っておいた。
発動条件は狼煙の打ち上げ。

廃工場の場所を意識しても、その場所への、道が意識出来なくなる
結界魔術。

俺の魔術展開を見たであろうあのダガー使いならば、無意識下にせよ、意識下にせよ此処に致る事が出来る筈だ。

この結界は急場凌ぎの簡易式結界だが、相手が魔術騎士団でも無い限りは破られないだろうという自信があった。

元々この魔術は、魔術騎士団が戦争時、自軍の拠点を作るための魔術だ。

故に、簡易式でも、威力は魔術騎士団お墨付き。
本物は長たらしい儀式をする。

「ではでは、中に戻るとする……っ」と

するか、と言いかけて右にすつと体を逸らす。
ダガーが、地面に突き刺さった

「お早い到着だな？
遠くからしか戦えない腰抜けさん」

ダメ元で挑発する。

ダガーの刺さり方から、大まかな発射地点は分かるが、今、魔術は使えない。

何故かと言えば、簡易式の結界の場合、少し魔力の波が乱れれば、一気に結界は瓦解する。

此処に辿りつけるのはダガー使いだけの筈だったので、ダガー使いが来るまでの時間稼ぎが出来れば別になんでも良かったが、すぐにけりが付くとは限らない。

だが廃工場内には魔力の波の完全に遮断する、結界魔術とセットの封印魔術が施してある。

流石に片腕で張るのには疲れたが。

「……………」

挑発に対し、相手は無言。

俺も、魔術を使う覚悟を決めた時、ダガー使いは

廃工場の屋上へと、何の前触れも無く現れた。

まるで陽炎のように

現れた。

「…よう。ようやく姿見せたな。腰抜けダガー使い」

「お主、あまり頭に乗るなよ。ワシも手が滑って殺してしまうやもしれん」

今、この瞬間、戦いの幕は切って落とされたのだ。

「腰抜けじゃねーかよダガー使い。せこい戦い方しやがってよ？」

俺は老人口調の…あれは20代か？

白髪の、髪は老人の青年に挑発した。

「それはお主も同じだろうて。魔力と存在遮断の結界か。誘いに乗ってやったのだ。感謝してほしいぞ」

ちゃんと魔術にも精通してるか。

馬鹿ならやり易かったのに

「ふうん、んじゃまあ、感謝するよ。とっとと始めようや」

俺に相手の目的を聞く主義は無い。

何であれ、邪魔をするなら倒す。

徐々に、場に殺気が満ち始めた。

「」

「」

睨みあい、両者動かない。

隙を探るが、全く無い。

…先に動いたのは俺だった。

走りだし廃工場入り口へ、しかしダガーが飛来。
またも回避する。

「…ちつ、やはり、雑魚では無くなっ！」

少し嬉しげな声。まるで、新しい玩具を見つけたような

…こちらは相手の姿が見えており、攻撃が来ると分かっている以上、ダガーに当たってやる義理は無い。そこそこ場数を踏んでいる俺には、直線的なダガーなど軽く避けられた。

右へ左へ回避しつつ、廃工場入り口へと走り…

呆気なく入る事が出来た。

「っと、入れさえすれば…」

さして広くもない廃工場の丁度真ん中に立って四方を警戒する。

あいつはいまだ本気を出しはしないだろう。

さっきの声で分かるが、あいつは絶対、戦闘を楽しむタイプだ。故に、戦闘を長引かせるため、外の結界を破壊したりはしない筈。

魔術戦闘ならこちらに利があるとは思うが、恐らく向こうも魔術を使ってくるだろう。

もしくは俺の勘が外れており、不意をついて攻撃してくるのか…

そうして四方を警戒していると、少し予想外に、廃工場の、真正面の入り口に現れた。

「…！」

「ほう？驚いておるな？かつかつ！愉快愉快！」

本当、お前若作りしてないか？

と、言いたくなる台詞と共に。

「確かに、ワシは暗殺が得意ではあるが、正々堂々、が嫌いな訳ではないぞ？」

「…そうかい。俺も暗殺が得意だが…」

ふっ…と表情を緩め

「不意打ちが大好きだ！」

工場内の仕掛けを起動。

…まるで俺が悪役みたいだなあと思いつつ。
魔力を工場の四方へ拡散。

強烈な光が、工場を包み込んだ…

ある魔術師の物語 四話 第二章（後書き）

あんなの主人公の戦い方じゃない！
とか言わんで下さいね（＾―＾；）

主人公はあくまで人間ですから、やはり格上相手や不利な状況では不意打ち、暗殺が一番だと思っのです。
ですので主人公は好き好んでそういう戦い方をしますが、殺人が好きな訳ではありませんので。

では、出来ればまた、四話第三章でお会いいたしましょうm（
―）m

ある魔術師の物語 四話 第三章（前書き）

戦闘、続行中です！

ある魔術師の物語 四話 第三章

光が工場内を包み込んだのと同時に。

「身体能力制御！」

光は使用術者の俺には通じない。

作戦は、身体能力を跳ね上げ（右手は使えないながらも、そこは速度でカバー）

接近して頸動脈に強烈な一撃を叩きつける。

相手が体に硬化を張る可能性もあるが、その場合は打ち込む寸前に「硬化」の効果を打ち消せる

硬化

の魔術を叩き込む。

スペルは「硬化」の一言の為、十分間に合う。

作戦はシンプルイズベスト。

殺さずに済む方法であり、しかも勝機は相手が殺しや戦いのプロなら跳ね上がる。

なぜなら、これまでの俺の経験上、優れた能力を持つもの程、いつしか簡単な戦い方を止めてしまうものだと感じいたからだ。

そして、終いには相手の簡単な策にも引つかかる。しかしこのダガー使いは、俺と同じような、暗殺者の戦い方を好むゆえに相性は悪いが、光で見えねばダガーは使えまいと踏んだ。

まあその読みは、見事に外れてしまったが。

「ふむ、光で視覚を塞ぎ、接近戦にて仕留めるか。確かにいい手だが…」

ぬるいわい

距離的にはいまだ遠いのに、しっかりと聞こえたその言葉と共に。

有り得ない角度からダガーが飛来した。

「上だと!？」

直滑降。

確かにダガー使いは目の前に居るのに、俺の真上から飛来したそのダガーは、俺の急所に直撃…

しなかった。すんでのところで切り抜ける筈だったが、前からもダガーが飛来していた為に無理やり左へかつ飛んだからだ。

ダガーは回避出来たが、魔力の光は収まってしまい、場の光度が元に戻る。

そして、白髪青年は目を開け、ニヤニヤした目でこちらを見た。

「かつか！ぬるいのお魔術師。まさかその程度ではあるまいな？」

「…」

ヤバイ。

場の空気に、俺が段々と後手に回りつつある。

「今の魔術か」

「ああ、ワシは器用なのでな。魔術にも生かしておるのだ」

…さっきのは、多分

「あんだ、この廃工場の至る所にダガーを仕込んであるな。多分、相当数」

そう。あれは多分、ダガーを空中に固定し、何らかの形で不可視にしておいて、接近した獲物に叩きつけるという、魔術では無かった物が魔術へと昇華された、一業！。

どうやら仕込んでおいたものを発射した時にはダガーは姿を現すよ
うだが

「…いつ仕込んだ？全く気づかなかったがな？」

「かつか！いつも何も、お主が光を放った瞬間じゃよ。あの瞬間に
空中にダガーを工場中にばらまいて固定しただけじゃ。そうじゃな
たしか七十本くらいかの？」

…その話が本当なら状況はかなりマズい。

もはや接近戦に持ち込める訳が無いだろうし、全弾一斉掃射されれ
ば回避出来ないだろう。

「しかし、お主から殺気を感じん所を見ると、さては手加減してお
らんか？」

「…手加減はしてねえよ。殺す気が無いだけだ」

「ワシもなめられたものじゃな。こちらも何時までも遊んではおれ
んのだ。一応、仕事なのでな」

…こいつはどうやら私情で動いていた訳じゃないらしい。

「…本当はこんな事を言う気は無かったんだけどな」

「かつか！なんじゃ？命ごいか？もう面白い策は無いのかのお？」

手はまだあるが、内容を纏めるのに時間がかかりそうだった為、俺は時間稼ぎの会話をし始める

「なんで、あの人を狙うんだ？」

「まあ、仕事じゃな」

まあ、話すわけがないよな。

ついでに情報が聞き出せないかと思ったが虫が良すぎか。

「理由は？」

「話す義理は無いの」

答えないのを知りつつ、もう一度問いかける。

…よし、策はまとまった。

時間稼ぎは切り上げようとして…

「まあ、よいか。久々に楽しいのでな」

「なんだ、理由でも話してくれんのかよ？」

話す気になったらしい

マジか。

100%言わないと踏んでたのに。

「あの小僧、お主が庇っておる者じゃがな。フレアス固有の禁術を

外へリークしようとしたのじゃ。」

「リーク？」

「ああ。なんでも、黒い月、とかいうギルドにの」

…え？

「え？」

なんていうか。どう言ったらいいのかわからなかった

「1人でポケーと涙目で広場に突っ立っておったのでな。阿呆かと思っただわい」

つまり、俺の到着が遅いからじれてたと。

セリアに焼かれかけてた時間遅れていたから

「まあ、そんな所じゃよ。ワシからも質問してもよいよな？」

…つまり、今の俺は殺さないように、騒ぎを大きくしないように、とか気にする必要がある

「お主の名は？気分がよいのでな。お主が死してからも覚えておくとするぞ」

無くなったな

「…ゼロだ。あんたは？」

「かつか！ジーク・ゾルディアじゃ」

ではの…

と、予備動作無し、360度から飛来し、襲いかかる七十のダガーを

「汝求めしは確固たる盾、清廉なる剣」

「具現せよ」

「白光」

具現した、魔力の剣を一振りし、全てのダガーと、ジークと名乗ったダガー使いを、工場外へ吹き飛ばした。

ある魔術師の物語 四話 第三章（後書き）

楽しんでいただけましたでしょうか？

では、出来ればまた次回お会い致しましょう m ((m

ある魔術師の物語 四話 第三章 キャラ設定（前書き）

この物語を楽しんで下さっている方が居たら、これからもよろしく
願いたします m (_ _) m

ある魔術師の物語 四話 第三章 キャラ設定

ゼロ

光と風の複合魔術と、体術、文字通り命を懸ける禁術と、時には非情な作戦を使つて戦つ。

使用出来る魔術

光と風の上級複合魔術

タケミカズチ

風と光の中級複合魔術

飛雷震

風系統

風刃

風系統 身体能力補正

絶影

風光 初級複合魔術

身体能力制御

風光 初級複合魔術

硬化、軟化

光 上級武装化魔術

白光

ジーク・ゾルディア

得意系統の魔術属性は現在不明

大量のダガーを空間に固定して戦う。

これは、ただの魔術ではなく、武術を無理やり魔術の域にまで昇華したものと思われる。

追われている人物

現在

年齢不詳

性別不詳

容姿不詳

ただ、ジークの言葉から性別は男性だと思われる

セリア

ゼロがファロの近くの森で出会った女性

四話 後半にて登場予定

ある魔術師の物語 四話 第四章（前書き）

明日テストなんで勉強します（-.-;）

ある魔術師の物語 四話 第四章

「ぬぁっ！」

ここにきて初めて、ジークは余裕の表情を崩した。

「お主、雑魚ではないとは思ってたが…
よもや、ここまでの力を隠しとったとはの」

そう言いつつも地面に軽く着地したジーク。

仕留めるつもりだったが七十のダガーが直撃を防ぎに行ったようだ。回りにはバラバラとダガーだった物、すでに俺の魔力で粉になった破片が雪のように降り注いだ

俺が使用した白光は、魔力を凝縮し武装化

爆発的な力を具現化する技法。

破壊のみに特化する上級魔術。

莫大な力を持つが、その代わりに近接戦闘の武器にしか凝縮できない。

飛び道具にすれば魔力は途中で霧散するからだ

人によって形は様々だが、俺の場合は剣

方刃にも両刃にも魔力の練り方によって可変できる。

今は魔力を攻撃として放出する事に適した、両刃にしている。

「おいおい、さっき言っただろ？殺す気はないだけだと。今、その必要は消えたがな」

俺の愛刀、白光

形態変化をして魔力凝縮形態にすれば

白夜

という方刃の刀になる

「ふむ…なる程の。あの小僧の探し人はお主で、お主が黒い月か。じゃからお主もあの小僧を探している間は面倒を起こすまいと、あんな小細工を施していた訳か。」

「ああ、そうだ」

左手の白光に目をやる。

左手一本で振るうのは少々面倒だが、長年連れ添った愛刀だ。万が一のミスは無いだろう

「ふむ…ワシを結界外に吹き飛ばした、ということは衛兵が来る前にワシを倒す自信があるわけか」

「ああ、そうだ」

二回肯定を繰り返し剣を構える。

長々と喋っていれば、衛兵どころか魔術騎士団が飛んでくるかもしれない。

面倒事はさっさと終わらせるに限る。

「白光〃白夜」

形態を方刃に変化、俺は八相に構え、ジークを確実に斬れる間合いへと足を踏み出そうとして…

「ふむ、ワシの負けじゃ」

…踏み出せなかった

両手を万歳して降参のポーズをしたからだ

「…フイ、いきなりどうした？」

「負けじゃと言ったのじゃ、ここで長引かせればワシは不利になるじゃろうし、衛兵も飛んでこようしな。捕まりたくはない」

あれ？どうゆうことだ？

「あんたはファロからの刺客じゃ無いのか？」

「いや？ただ

厄介な取引が行われるから、小僧を殺せ、多分戦いがいのある奴も現れるだろう

と言われただけじゃ。

ワシは報酬と血湧き肉踊る戦いさえあれば依頼人など気にせんのである。それにワシは武器を吹き飛された。多数の衛兵相手にどうしろというのじゃ」

本気が冗談か、おそらくジークという男は素手でも衛兵を圧倒しうると思うのだが

と、その時

あそこか！この魔力はなんだ！

隊長！念のため、魔術騎士団に応援依頼を！

衛兵達であろつ声が聞こえた。

「っと、噂をすれば影、というやつか。ワシは逃げるとするかのか」
カッと靴を鳴らして万歳のポーズのまま一気に跳躍し、廃工場の屋根の上に飛び上がって着地した。

「また会える日を楽しみにしておくぞゼロよ。ワシもまた、腕を磨いておく」

そう一方的に告げると、また陽炎のように消えてしまった。

「……」

釈然としない。

何だろつあの爽やかさ。

ていうか絶対戦闘続行できたら、あいつ
とか思ってる内に大量の足音がどんどん近づいてきた。

「っと、やべえな。とつとと逃げるか」

俺は廃工場の奥から左手で人を担ぎ上げ、裏口から外に飛び出た。
裏口には人の気配は無い。

「身体能力制御」
魔術を行使

担いだまま走ってファロの門を目指す。

「さて、依頼は達成して無いが、あいつの言葉からしてこの人が合流対象って事なんだろうけど、このままにしとくとマズいよな、色

々と」

右手がヤバい。

それと担いでる人も容態がよくないみたいだし…

「かくまってくれそんな場所とか人とか…」

あるわけがないし

居るわけが…

居た。

一人だけ

「…しょうがない、行ってみようかな。

行く当てもないし…

依頼達成まで帰れないし」

俺は、本当はもう会うことは無いと思っていた彼女の家を目指し始めた

そう、セリアの住まう家である

ある魔術師の物語 四話 第四章（後書き）

楽しんでいただけましたでしょうか？

では、出来ればまた次回お会い致しましょう m ((m

ある魔術師の物語 四話 第五章（前書き）

テストの点を確認したら思いの他上手く行っていたので今日は多めに書いてみました（笑）

ある魔術師の物語 四話 第五章

ファロのすぐちかくにある森。
そこにセリアは住んでいる。

しかし森に行き着くには問題が一つ。

ファロが厳戒体制の為に、門にも衛兵が集合している。
気づかれずに突破するのはまず不可能だ

「さてと、どうしたもんかね…」

とりあえず近くの建物の脇に隠れた男は、周囲を見渡す。
両手が見えるならまだ方法はあったのだろうか…

「はあ…」

「はあ…」

…？なんか重なった

「よう、あんちゃん、あんたも外に出たいのかい？そんな荷物持って」

振り向くと、そこには吊り目の、如何にも軽薄そうな青年が立っていた。

「…そうだけど、あんたは？」

警戒態勢を取る。

この男からは、全く気配を感じ無かった
正直、背後にたたれた事にすら気づかなかったのだ。
あと、俺が左手に抱えてるのは人である。
端からみたら完全に人攫いだ。
だが

「はっは！実は俺も外に出たいんだけどね、今厳戒体制が敷かれてるっしょ？だから出れないんだよねえ」

青年はカラカラと軽薄に笑う

「…そうかい、それは大変だな」

「いやいや、君も実に変そうじゃないか？大きな荷物を抱えてさあ？」

ニヤニヤと俺の左側を見る。

「一つ言つとくが俺は別に人攫いとかじゃないぞ」

誰も信じないな。こんな状態じゃ

「はっは！その話を一体誰が信じてくれるのかなあ」

やっぱりな！

「なんだ？衛兵でも呼ぶ気か？」

「おいおい、そんな事したら俺まで怪しまれるじゃないか？今は別にそんな事はしないよ」

今は、ね。と呟いた
ニヤニヤと、左側を見ながら。

「お前、一体何が目的だよ？さっさと話せ」

じれったい。

さっさと話せと思う

右手とか色々時間ないっての

でもまあ、要件は大体察しがついてるが

「はっは！そうこなくちゃ！実はさ、門を突破する作戦を手伝って欲しいんだけどさ？」

やっぱりか

「別に構わいがな。俺達もさっさと外に出たいから。だが、お前が俺達を捨て駒にしないかが心配なんだがな」

心配、というか、俺達にちゃんとメリットがあるかが分かるまでは動きたくない。

今の俺は交渉出来る立場じゃあないなあと思いつつも聞いてみる
すると軽薄そうな青年は

「はっは！それは絶対に心配ないよ。これは実に単純な作戦だしね。それに、協力者を裏切るのは嫌なんだよねえ」

「…100%は信じられないが、分かった。手伝おう」

こんな状態じゃ、信じてみる方が利口だろうしな。

「はっは！じゃあ、協力関係成立だね。握手握手！って手が塞がってんだったね！」

「んな事はどうでもいいから作戦を話せよ……」

なんかこいつ相手は凄い疲れる。

「ふむ、じゃ、話すね。作戦てのはね……あの門を吹っ飛ばして欲しいんだ。」

………

「じゃあ、元気でやれよ？」

ひらひらと手を振って背を向けた。

「ちよつと待った！話は最後まで聞こうよ……！」

もの凄い速度で肩を掴まれた

「あんたが馬鹿だという事は分かった。だから手を離せ、他を当たれ」

門を吹き飛ばしたりしたらまず国家の敵である
ていうか今の俺にそんな力が残ってないし、あの門は国を守る門である。

各国の正門は、全て固有の強力な魔術対策が施されている

これは、先の大戦時に出来たシステムだ。

ファロの場合は、確か門に魔術を撃った途端に、防衛システムが発動し、術者が一瞬で燃え上がるのでは無かったか？

…なんかもう、疲れたよパト。ツシュ

「ちよつま！ええい！

えいへいさー！」

バキィ！

「ぐおっ！」

この野郎、本気で衛兵呼ぼうとしやがった。
ていうか、びつくりして本気で蹴っちまった

…黙祷！

「いやいや、死んでないから。全く酷いな、話は最後まで聞いてっ
たら」

なんかしょんぼりしながら立ち上がる。

…わりかしクリーンヒットだった筈なんだがな

「…で、本当の作戦は？」

「だから門を吹っ飛ば」

よし、死ぬまで蹴るか

「ちょ！無言で足を上げないで！門といっても魔力門だってば！」

「魔力門だと？」

魔力門

各国の正門を守護する守護魔術を常に確立する為、大量の魔力を常に門に溜める。

そして溜まりきってしまつて溢れ出した魔力を抜く為の道の事である。

魔力門は、正門と違って魔力門を構成している魔術を紐解けば魔力門は簡単に崩れ去る

なぜかといえば、形のない魔力には、防衛魔術を施せないからだ

「…つまり、門の魔力の流出を多くする訳か」

そうすれば一大事として衛兵はまず魔力門へ向かう
そして正門は手薄になる

「そういう訳か」

「そうだよ？いや、察しがいいね。びつくした！」

なんか万歳して本気で驚いてる。

なんかイラっとくるわ

「…作戦自体は理解した、だが問題は2つだ。まず俺は魔力門の場所を知らない、第二に、魔力門を構成する術式は高度な物だ、なんで俺にその仕事を任せる？」

そう、魔力門は国家によって秘匿されている。場所が分からねば破壊しようがない。

第二に、気になっていた事だが、俺は魔力門を破壊する事は出来る。術式を解く事は出来る。

だが、これは高度な技術を求められる。

普通の術者が魔力門を破壊しようとすれば、術者の頭がパンクするだろう。

しかし、なぜ俺に、この役目を頼んだのか。

…あの気配の消し方からも相当な腕前だと分かるが俺に会ったのは偶然じゃ勿論あるまい。

つまり、最初から俺が魔術師、しかも自分で言うのはあれだが、かなりの技術を持った術者だという事を知っていた。という事か。

「…まあね。深くは話せないけど、俺は君の事を知ってるよ。
黒い月の…ゼロだよな」

ニヤニヤしていた男は、酷薄な笑みをその顔に讃えた

「…お前、この人を殺しに来たのか？さっきのジークとかいう奴みたい」

「殺す？いやいや、君も、その人も無事外に出す手伝いをすることが俺の仕事だよ、流石に依頼人までは言えないけどねえ」

酷薄な笑みを一瞬でニヤニヤとした笑みに変えると、服のポケットから石のような物を取り出した。

「それは…！」

「そう、治癒石だよ。」

今一番大きな国家、ホリアスすら持っている数が少ない貴重品さ
君の腕とその人、応急措置させて貰うよ。」

ヒョヒョイツと俺の右手と、抱えた人物に投げつけると、右手の感
覚が戻り、また動くようになり、抱えた人物の呼吸音も、少し良
くなった気がする。

治癒石とは、魔力の高濃度の凝縮体。

人体の治癒力を劇的に高め、ある程度の病気や怪我なら、たちまち
治してしまう、ある種の奇跡

しかし、先の大戦時、大量数が使用され、現存している治癒石は少
ないとされる

「…こんな物を持ってる、てことは、そこそこ信用できる組織の人
間で事か」

「はっは！信じてくれて無かったんだねえ、まあ、いいや。少しの
間だけど、共闘よろしく」

男はニヤニヤとした笑みを浮かべ、今度こそ、握手を求めてきた

ある魔術師の物語 四話 第五章（後書き）

楽しんでいただけましたでしょうか？

出来ればまた次回、お会いいたしましょうm（
—（
m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2935s/>

ある魔術師の物語 四話

2011年10月8日23時27分発行